

あかる

横山 若菜

——わかんない
 クロッキー帳のページ目を開く。黄ばんだ薄い紙に鉛筆の先が
 触れると、木材の軽さを思わせる心地のいい音が鳴った。調子に乗
 って一息に書き切る。文字が流れる。
 絵を描くべきじゃないかと一瞬思う。何をやっているんだろうと。
 けれど自らの迷いを認めた瞬間、消しちやだめ、と言葉が頭に閃い
 て、鉛筆を中途半端に浮かせたまま、消しゴムを視界の端におさめ
 たまま、私は自分の言葉に対峙する。
 そうか、と呟く。これが今の私のすべてで、きっとここから始
 まり。だから、なんでもありだ。

*

さんすう、と書かれたあの教科書を、表紙の幾何学模様までいま
 だによく憶えている。記憶の中にあるそれはちよつとよれて角が白
 く毛羽立っていた。
 さんすうが好きだった。隣に座っていた男の子は二桁の足し算引
 き算のあたりで躓き始めて、私は席替え以来ずっと彼の手助けをし
 ていた。それが嫌いではなかった。何度も横で筆算を書いてみせ、
 いち繰りあがるんだよ、じゅう借りてくるんだよ、と囁いた。右隣
 から見下ろした少年の手許、その横長の爪にはいつも何かが詰まっ
 ていて、それはたぶん校庭の泥か、彼が頭を搔いたり鼻の穴に指を
 差し込んだりしたときに付いてくる汚れだったと思うけれど、私は
 それを他のクラスメイトのようににあからさまに不快な顔で見つめた
 りはしなかった。彼は誰かに手を洗えと怒られたりしないのだろう
 か、と思った記憶ならあった。ともかく当時の私はそうやって脳の
 半分くらいを余らせて隣席の少年を眺めていたが、一方の彼は紙に
 顔を近づけ目を見開き、私の指と戸惑う鉛筆の先と整然と並ぶ数字
 だけを視界に入れて小さく唸っていた。
 当時の私はたぶん、他人のことをかわいそうだと思っていた。教
 科書の音読のときにどもってしまふ、先生に当てられても答えられ
 ない、ドロケイで捕まりっぱなしだから助けに来てくれる人がいな
 い、私はそういう子どもではなかったから、かわいそうなクラスメ
 イトを助けてあげたいと思うことが正しいのだと信じていた。
 そうやって担任の教師にも同級生にも頼られた私は、自分の信条
 が他人に認められる経験を繰り返し返して気分が良くなり、人助けに奔

走する毎日を送った。よく出来た子、優しくて気が利いて、頭の回る子です、保護者面談のあとで教師に言われたことを報告してくる母の笑顔が私を見下ろしているあの光景を、今でもまばゆい一枚の絵のように思い出す。

あの日の母はただの面談なのによそゆきの赤いワンピースを着ていて、私は目立ちすぎるその恰好と必死に若作りする母のそういうところが嫌だったからよく憶えているのに、やっぱり記憶そのものはあたたかな光に満ちているのだった。脳内に広がるその絵は完璧なバランスで成り立っているけれど、どこか偽物じみた匂いを漂わせてぴかぴか輝いていて、それが空恐ろしい。それでも私は、その絵をどうでもいいものとして捨て去ることができず、自分の奥深く、けれど探さなくても見つけられるところにしまっておいた。

中学に上がっても、私はその記憶を底に抱え続けた。もちろん、学級委員に立候補した当時の自分にそんな自覚はなかった。担任が委員をやってくれる人はいないかとクラスに問うたとき、私は早くも激しく跳ね回っていた心臓の音が首筋から聞こえるそのことばかりを気にしていた。迷いなく挙げた手を高く伸ばすと、手のひらの皮が張って指が反り返った。そういう態度について小六のときに「また出しゃばってる」と嫌味っぽく言われたことがあるが、私を衝き動かしていたのは見栄などではなく、もはや信条でもなかった。誰かを助ける役に回るとは身体に染み付いていて、私はなにかに導かれるようにそういう役割を担うことを求めた。自分の名が教師の手によって黒板に書かれてゆくときさえ、当然のなりゆきだという気がしていた。心臓の音だけがいつまでも激しかった。

委員の定員は二人だった。私が伸ばした手をそのままに教室を見渡すと、後ろの方で知らない少年が同じように手を挙げていた。成長を見越してつくったのだらう、彼が着ている学ランはやたらと大きかった。彼の目が私を捉えるなりやわらかく細められた。彼は初対面の相手に親しげに微笑みかけるような人なのだ、という好感や安心や尊敬よりも先に、私はどきりとした。その笑顔を知っていた。彼の左頬を少し引き攣らせる笑い方、それはあるとき母に指摘された私の癖だった。

笑っている人間はとて無防備だと思う。私は母に言われるまで自分がどのように笑っているかなど考えたこともなかった。「いつも苦笑」と母にからかわれて、一度もちゃんと言ったことがないと言われたような、あなたの笑顔にがっかりしたと言われたような、和やかなその場の雰囲気には似合わないひどく心細い気持ちになったのだった。そのことを今すぐ彼に聞いてほしいと一瞬思ったが、係決めの時間が終わってすぐに声をかけてきた彼にそんなわけのわからない話をするつもりはなかった。

私はある程度頭に浮かんでいた当たり障りのない挨拶を口にし、彼は穏やかな表情を浮かべて私に接した。落ち着いた雰囲気、彼が言葉の繰り出す様子を前に、よく出来た子、といつか聞いた褒め言葉がぼんと頭に浮かんだ。同時に今後の委員の活動への期待が膨らんだ。彼となら、なにかすごいことができず、きつくないか、と本気で思った。そういう人に出会うのは初めてだった。

実際、彼はとても優秀だった。互いの性格や意思をすり合わせる、どこにも時間を経た、私達はとも自然な関係になった。それはどうにも形容し難く、けれど親友や恋人といった言葉によって縁取られる関係よりもずっと心地が良かった。委員としての活動を繰り返すうち、驚くほど気が合うことにも気づいた。それが可笑しくて、馬鹿みたいな冗談を飛ばしたり軽口を叩き合ったりした。それは今までにない充実感を私にもたらした。私は楽しくて仕方なくなり、放課後に時間ができると、帰ろうとする彼を引き留めてくだらない話をするようになった。そういうときの時間の経過は信じられないほどに早く、わざとらしく嫌がる彼を帰らせない、というおふくは定番になった。仲良いな、と呆れたように言うクラスメイトが、私達を置いて教室を出て行った。

家どこ、と訊いたのは、そうしてくだらない話をしていた放課後のことだったと思う。「なんで」「だってあんたが休んだら、私が委員のプリント持っていくんだよ？」「はあ？ いいよおせっかい」。あのやりとりを今でも憶えているのは、それが委員として彼と知り合っただけの私がする質問にしては私的すぎたような気がして、口にしてしまったあとで必死になって言い訳を考えたからだ。けれど彼は気にするそぶりも見せなかった。そして私達は、その会話をきっかけにたびたび一緒に帰るようになった。交差点で別れるとき「じゃね」と手を上げるために捻られた彼の背中を見て、私は充足感でいっぱいになるのだった。

夏休みが明けてしばらくして、私は、もう任期終わっちゃうね嫌だなあ、と何気なく彼に言ったのだった。放課後、委員の集まりのあとの帰り道。意味を捉える前のぼんやりした彼の目が音もなく私に向いて、そのすぐ横を、撫でるような涼しい風が通り過ぎていった。私が通っていたのは二期制の中学で、前期の終わりがすぐそこに近づいていた。

「あー……」
 そのときの彼の反応は鈍く、けれどそれがなにかを思考している彼の態度だと知っている私は彼を急かすようなことはしなかった。「もう仕事、ないんだっけ」
 なぜか彼はいつもより低い調子で言った。

「ないねえ」

私は彼が同じように任期の終了を惜しがっていると思ひ、彼も感じていゝであらう哀愁をからかうように言った。けれど返事も皮肉も返つてこなかつた。彼は黙つていた。なんだろ、と思つたけれど、余計なことは言わない關係が心地良くて一緒にゐるのだからと、私はとりあえず彼に合せて口を噤んだ。そうしてゐたら余計にしんみりした空氣になつてしまひ、何気なく視線を遣つた夕焼けがひどく儂げに見えた。私達はいつになく静かに歩き続けた。普段何と言つて彼と別れていただろうと、私は交差点が見えてきたあたりからずつと考へていた。

「……俺さ」

いつも流れるように別れるその場所で彼は不意に立ち止まり、口を開いた。いつもと違ふ展開に一瞬反応が遅れ、私は戸惑いに目を踊らせながら彼の顔を見上げた。予想外のことは苦手だつた。委員の仕事のときもたびたび不測の事態に遭遇したが、慌てる私に代わつて彼がうまく立ち回つてくれた。

先程から私のまわりに漂う「なんだろう」が、じわじわと形を現してくる。足許に伸びた影が長かつた。

「全然、共感できないわ」

彼の声はとても冷たかつた。そのことにはつとしながらも、私は話の内容が掴めなかつた。ただ彼の硬い表情を捉えたあと、そこから目を逸らすことができずにいた。視界の端で夕焼けに浮かび上がる遠い建物の輪郭がぼやけていた。

「河原、楽しそうだよな。誰かの上に立つてるとき。……いやまあ、俺もそうだろうけど、それにしても、なんかごめん、途中からついていけないかつたわ、それで任期終わるの嫌とか言われても、全然共感できないっていうか」

彼は笑つていた。私は一瞬で突き離され、彼の左頬が引き攣つてゐるのを見ながら、やつとのことと唐突な戸惑いのみこんだ。彼は私とは違つたのだ。それは当たり前前に知つていたはずのことだつた。何を動揺してゐるのか自分でもわからなかつた。やけに目についてしまふ彼の笑ひ方を、私は嫌おうとした。

「気持ちよくなつてゐるっしょ。俺そういうの、無理。……あと、なんもないのに毎回引き留められんのもだるい。ちよつとしつこいんだよ河原」

彼は時々冗談を言うのだった。その中には並んだ言葉を冷静に眺めるとなかなかな辛辣なものもあつたのだが、これまで、彼の言葉が私を傷つけたことはなかつた。私のこれまでを「無理」と拒否した彼ののつぺりと乾いた唇は少し歪んだだけで、いつまで待つてみても微笑みには変わらなかつた。私はちゃんと自分を恥じた。そして

どうにか「なにそれひどい」と言った。無理に笑って見た。しかし私の左頬も引き攣っているのかもしれないと気づき、すぐに笑うのをやめた。そのときそこに残ったのは、誰も対処しきれない薄ら寒い空気だけだった。

じゃ、俺勉強あるし帰る。彼はさっぱりした顔でそう言った。放たれた言葉はとても遠くに聞こえた。私は勝手に去ってゆく背中をただ黙って見ていた。彼のワイシャツは皺一つなく、真っ白でとても清潔だった。

私は一人になった。静けさの中、胸の奥に生まれた何かを自覚する。どろどろと溶け出して流れ、ゆっくりとうねり、やがて渦を巻きはじめた。それは、彼が私に向けたいくつかの言葉よりも強い破壊力を持っていた。私は簡単に足をすくわれ、溺れた。

これは私の過ちなのだろうか、きつとそうだろう。彼と過ごす時間、私が勝手に救われていただけだった。それなのに馬鹿みたいに心から信頼なんかかして、彼も自分と同じ気持ちでいると思ひ込んだ。

調子に乗って踏み込みすぎた。でもどうして。彼と私は似ているはずなのに、どうして――。混乱が渦巻く。白い泡を立てて蠢く。

訴える相手はいないのに、言葉がいくつも現れては不気味に歪んで混じり合い、私を取り巻く液体の中に流れ出ていった。私は酸素を求めて足掻いた。必死だった。けれど実際には、どこからともなく肉じゃがの匂いがしてくる住宅街のまんなかで立ち尽くしているだけだった。

不意に彼に対する怒りが湧いた。――ふざけるな、いやつのぶりなんかしやがって。私は彼を責めた。けれど、既に去ってしまった。た彼に向ける情けない暴言に、私の怒りはすぐに鎮まってしまった。

代わりに彼の誠実さばかりが思い出されてきて嫌になった。液体はしつこく私にまとわりつく。荒れ狂う渦のただ中で私は揉まれ、傷つき、赤黒く粘つく塊を身体のあちこちから吐き出して藻掻いていた。

何もかもが重たかった。私はその場にしゃがみ込んだ。指先が小さく震えていた。けれどいつまでも一人きりだった。気づけば陽は落ちていて、遠い信号の赤が目を刺した。私は拳を握りしめて立ち上がった。学校指定の重いリュックが肩から落ちた。乱暴に持ち上げ直すと頭の中で激しく暴れるなにかに気づいたけれど、そこから具体的なものを取り出して思考する気力はもうないのだった。帰ろう、とだけ、ぼんやりと思った。

自宅まで歩いてきてドアを開け、中に入り、ドアが閉じる音を背中に聞いた瞬間、何もかもが飛んだ。私はあえて自分から、頭の靄を取り払った。生々しいものが自分の内側に満ちていることに気づ

点けていた。そのまま二階の自室に向かい、殴りつけるように電気を
 目についた赤のサインペンをペン立てから引き抜いて、私は机の
 上にあつた白い紙を見た。どうしてそこにあるのか、何の紙なのか、
 などと考える暇はなかつた。サインペンのキャップを外す。さっき
 からずっと、自分の出す音がとても遠くに聞こえている。熱い。臍
 の下で熱いものが生まれ、血液に染み出して全身に行き渡る。私は
 ペンを動かした。

— なんぞ？

思ったことはそのまま出た。ひらがな三文字を大きく書き殴り、
 すべてを押し付けるように、「？」の最後の点をぐりぐりと塗り潰
 した。紙は少し破けた。小さな穴から、赤く汚れてしまった机の表
 面が見えた。それでも足りなかつた。私は慌ただしく適当な紙を探
 した。そしてまたペンを握る。

そのとき私に残っていたのは、もう「なんぞ？」ではなかつた。
 もっと鋭くて、弱いのに強くて、自分にも他人にも向くような、完
 璧な言葉でなくてはいけなかつた。けれどどうしても、それ以上具
 体的にならない。胸の中心の、表面に近いところが爆発しそうだっ
 た。

初めてではないと思つた。ずっとそういうふうには、正しいもの、
 本当に大切ななにかを見つけられないままにいる。いつか役に立つ
 からとまわりの大人に多くの知識を与えられてきた。それなのに、
 自分のためのたつたひとつの言葉がわからなくて混乱している。私
 は本当に、大人が言うような「よく出来た子」だつたのだろうか。
 頭に入っているあれこれは大切なときにひとつも思い出されてこな
 い。私が積み重ねてきたものは、「気持ちよくなつて」という程
 度の勘違いだつた。

叫びたかつた。けれど一人で泣き叫んだところで惨めさが増すだ
 けだとわかつていたし、死ぬ、という低劣な悪口は浮かんでも彼の
 死を本気で望んでいるわけがなく、そういうことを書くのはとても
 怖かつた。適当な言葉が見つからないせいで妙な沈黙が流れ続ける。
 耐えきれない。気持ち悪い。

息がうまく吸えなかつた。喉が苦しげな音を立て、ペンを握る手
 に力が入つたけれど、やっぱり何も浮かばなかつた。

そのとき、ペン先が走つた。
 私の手が握る赤い軸、が紙の上を通り過ぎ、目でそれを追う。喉
 の奥で張り詰めていた空気が遅れてほどけ、零れ出てくる。そのの
 ち、少しの沈黙がゆつたりと流れた。一瞬だつた。とても長い一瞬
 だつた。

私はそこに、傷を見ていた。白い紙に流れた線、それは誤つて判

刀を自分の肌に当ててしまったとき、雑誌のページの縁に指を滑らせてしまったとき、自分だけがいつまでも気にする繊細な傷によく似ていた。改めて紙を見下ろす。自分でやったことだ。それなのに、遠くから自分の行為を見ていたかのように、実感がなかった。それが人差し指を赤い筋に向かつて伸ばす。触れたいと思った。それが本物の傷で、紙が血を滲ませているような気がして、その温度を感じてみたかった。しかし指先が辿り着く前、ぼつ、と透明な液体が落ちた。私は指先を引っ込め、慌ててその手を頬に遣る。泣いている。大きく息を吸い込めば上顎が粘ついた。

不意に号泣してばかりいた幼い自分のことが思われてくる。なんで泣いていたのか。私は、何だったのか。次から次へと生まれ出る涙の粒が目縁を越え、重力に引かれていった。私は顔を歪めないように必死で無表情を装った。一人きりの部屋で、誰に対してそうしているのかもわからなかった。

その日から彼との関わりがなくなつた。人望のある彼が私の醜態を誰かに話すのではないかと思うと恐ろしくて、声をかけることさえできなかつた。誰が何を思っているかわからない。そう気づいて、なんの関係もないクラスメイトとの会話もうまうまいかなくなつた。話したり聞いたりするそばから言葉が零れ落ちて、内容が入つてこないのだった。言葉が出なくなる、クラスメイトは不思議そうな顔で私を見た。それがいたたまれなくて、私は人と話す機会からできると逃げようになつた。

すべてが変わつてしまった。私は自分の中のかを失つていた。それはあの液体、黒々とした渦が奪つていったのに違いなかつた。しばらくしてから、あんなに仲良かったのに別れた？と彼が友人に訊かれていたところを目撃した。恋人同士だとまわりに思われていたことを知ったとき、私は音楽室から戻ってきたところだった。教室内の自席に向かつて踏み出した足を、人目を気にしながら引っ込めてトイレに逃げた。個室の鍵を掛けて和式便器を避け、横にしゃがみ込んだ。古いトイレの床は汚く、不快な匂いがぐんと鼻に迫つた。ここ数日女の子たちが気の毒そうに、けれど嘲るように私を見てくる理由が彼とのことであつたのだと、私はようやく気づいた。泣きたかつた。けれど泣けなかつた。トイレで泣くなんて惨めなことはできなかつた。個室で苦しもうにしている生徒がいると心配されるのも嫌だつた。同時に、私は他人に対してそういうことをしていたのかも思えない。全部、余計なお世話だつたのではないか。かわいそうになつてしまうことを一番嫌つていたのは私だつた。「気持ちよくなつて」という彼の言葉が何よりの真実だと思つた。誰かの世話をする、誰かを下に見る、私はそ

うやって自分を保っていた。自分のために、優しさのふりをして他人を利用していた。

チャイムが鳴って授業が始まったことに気づいたけれど、静まり返る教室の引き戸を開けて自席に着く勇気がなく、その一時間、授業をさぼってずっとトイレにいた。出られなかった。長いことしゃがんでいると身体のあちこちが内側から響くように痛んでくるので、時々立ち上がったたりしていたような気がする。あとはただ次のチャイムを待ち望んでいた。

それでいてチャイムの最初の音を聞いたとき、そこを離れるのがとても億劫に思えた。のろのろと、しかし目立たないように教室に戻り、リュックを取って逃げるように早退した。私はそれまで皆勤だった。けれどももう、そんなことはどうでもよかった。

その日のうちにクロッキー帳を買った。あの赤いサインペンの鮮やかさがいつまでも心に残り続けていた。なにかを書き殴ることが自分の内にわだかまるものを解放してくれるのだと、わずかな希望に縋るように線や言葉をクロッキー帳に押し付けるようになった。あるときは文章だったり、またあるときは点の集まりだったり、うずまきだったりもなく、馬鹿みたいに歪んだカラーペンの筆跡ばかりが溜まっていった。書いたものを見返す気にもなれない。一冊使い切るとすぐに新しいものを用意し、古い方は乱雑に自室の棚に押し込んで二度と開かなかった。

クロッキー帳は応急処置のようなものだった。けれども以前持っていた世界に対する納得感はどう頑張ってみても戻ってることがなく、むしろそれ以上に多くのものが失われていった。私はどうすることもできずにただそれを眺めていた。

危うい状態のままに受験を乗り越え、私は高校生になった。

進学校に合格し、両親や教師に褒められて喜んだのも束の間、入学してみれば中学の続きのような毎日が積み重なった。私は何者でもなかった。はじめの頃、目を輝かせて私に声をかけてきたクラスメイトも、私のぎこちない話しぶりに困ったような顔で笑い、次第に話しかけてこなくなつた。進学校にかわいそうな子はいなかった。私にできることは、大抵他の人にでもできた。暇だから勉強していたけれど、成績は振るわなかった。

ある朝起きたら、私の中で何もかもが死んでいた。何かを選ぶのには労力がある。生きていくつてのは選択の連続なんです、と誰かが言っていたのを思い出し、少し考えてみれば半年前、高校入試を目前にした中三の私たちに向かって当時の担任が口にしたもので、あれからたった半年しか経っていないのだった。半

年前まで教室の真ん中で声を張り上げていた自分を思うと、身体が
 強張るほどの羞恥を覚えた。高校入学後、進路についての話を聞かされる
 ことが増えていた。が、私は自分が何かを選べるとは到底思えなかつた。現
 在のことさえ持て余すのに将来のことを繰り返して問われ、困惑するしか
 なかつた。首を傾げ、今まさに考えている、というような恰好を取った。
 助けは求めなかつた。どんなに言葉を尽くして説明しても、今の自
 分の状況を他人に伝えることは不可能だと思つた。ずっと朝がだるか
 かつた。こうなるのも時間の問題だという気はして
 いた。だから驚かなかつた。朝起きて、いつもの通りに、制服に着替
 えなきや、と考へた。それを頭の隅に残したまま、私は部屋の中を舞つて
 いる埃のひとつを目で追つていた。自分でそうしたはずなのに、そのこと
 に気づくのがかなり時間を要した。昨夜雑誌に引いたカーテンの隙間
 から射す朝陽は白く鋭くて目が痛んだけれど、その筋の中を埃がきら
 きらと舞うので綺麗だつた。夢を見ているみたいだ、と言葉が浮かんだ
 あと、結局どこかで借りてきた表現のような気がして、そういう見方
 しかできない自分がひどく気持ち悪いものと思へた。正解が見つから
 ない。「何もかもが死んでいた」なんて、それこそフィクションの真似事
 みたい。演じてるんじゃない？心配されるのをあんなに嫌がるのに、
 かわいそうな子を演じて言い訳するの？それでも私はそこから動けな
 かつた。気分の重さが身体中に満ちていた。怠さは肌から滲み出て、
 部屋に広がってゆく。水のように、やけれど、水よりもゆつたりと。
 黒々と光るそれらは寄り集まり、やがて大きな流れに変わる。渦を
 巻く。轟々と音を立て始める。私も何も出来ずに、ただそれを眺
 めている。そして攫われる。液体に足を引かれてようやく事の重大
 さに気づく。私が愚かなのは知つている。液体、息苦しさ、その中
 で溺れながら、実際にはじつとしていてるだけの自分。あのときと
 同じだ、と気づいた。何も学ばない私。耳鳴りがした。助けを求め
 るように視線を向けた。クロッキ―帳は腰掛けてあるベッドから数
 歩先の棚にあつて、その距離が信じられないほど遠かつた。液体
 の中で溺れていても、時々現実に戻ってくる瞬間がある。それがと
 ても恐ろしかつた。このときもそうだつた。両親はとつくに仕事
 に出ている、誰もいない家は静けさに満たされていた。壁掛け
 の時計がしゃく、しゃく、と一定のリズムを刻んでいた。眠れない
 夜と同じように、その音が気になつて仕方なくなつた。気が狂い
 そうだつた。混乱の中で溺れている方が楽かもしれないという考
 えが頭をよぎり、自分への信頼感が消えてゆく。

そのとき、急に腹が鳴った。妙な緊張感が切り裂かれ、私は時計の音を意識の隅に置いたまま「生きてる、私のくせに」と思う。そうして、さっきも同じように何かを頭の隅に追いやったな、そうだ制服だった、と順番に思い出して、学校のことがまた頭に戻ってきただ。いやだ、と呟いてみる。起きてから一滴も水分を摂っていないで唇がばさばさに乾いていて、そこに乗った声も大半が息だった。いやだ。――いやだいやだいやだ。

やっぱりそういうシーン、どこかで見たことあるよね、と唐突に自分で指摘する。途端に覚えのあるテレビドラマのワンシーンが浮かび、わざとらしい自分、真似ばかりしている自分を中心に軽蔑する。私は知っているから真似しているのかもしれない、本当はそんなにしんどくないのかもかもしれないと不意に冷静になり、そしてまた混乱する。

そうしているあいだにも刻一刻と電車の時間が迫ってきていて、でも今ここでこうしているってことは今日は行かないな、と私は私を観察している。今日とはいうか、もう、行けないかもしれない。行きたくない。行かない。

それから、いつも通り家を出たはずの自分を思う。想像の産物でしかない自分の背中が、いつもの道を辿って駅まで歩いて、いま、七時十六分、改札を通過している。ここにいる私はなんだ？ 部屋着のまま、頭ばかりはたらかせてベッドの端に腰掛けているこの私はなんだ？ 本当の私は駅にいて意識だけが家にいるならもうそれでいいのだけれどとよくわからないことを思ったけれど、現実はどうこまでも現実だった。私はそこから目を逸らすことに必死で、そうしなければ耐えられないのだった。

行けるのに行かないのか。わずかでも隙ができると、私は私を非難した。学校に行けない、という感覚が本当はわからなかった。中途半端、どうせなら行けないほうが良かった、七時二十一分の電車が駅を離れた、と同時に薄っぺらい思考がいくつも頭を回っている中でそう思い、学校に行こうとするとお腹が痛くて、というシンプルな不登校児が心底羨ましくなる。そんなこと思っちゃだめ、真剣に悩んでいる人に失礼だし、と正論はいつもぽつと脳内に現れ、私を戒めた。そういうときに私を見張っている「私」は圧倒的に正しくて、それもまた恐ろしかった。

私は私をどうするべきかわからなかった。結局これは無断欠席だけれど、おそらく心配するのは担任くらいのもので、それも私が学級の生徒であるためにそうするのはだから、私は私の存在が消えてゆくような気がした。けれどそれは言葉ほどネガティブな感覚ではなかった。考えれば考えるほど投げやりになっていった。私は最後に、こんな人間がなんで生きているんだ、とまで思った。けれどなぜか、

私は死にたくなかった。どうしても、死にたい、と思うことができなかった。こんなふうになっても、まだ生きたいのだった。それはとても卑しいことのように思えたが、決して失われたい希望でもあった。ただ、今のこの状況ではそれがひたすらに鬱陶しいのだった。やっぱり自分は病んでもいなければ不登校でもない、と私は思う。けれどどうにも納得しきれなかった。たしかなものかひとつも見当たらず、思考の放棄を望んでいるのに頭が勝手に回っていた。

そうやって何日も家にいた。動けるときは動いたけれど、食事も睡眠も不規則で、適当にあるものを食べ、排泄し、ベッドに座っていたら一日が終わった。自室の時計の音に耐えられず電池を抜いた。風呂に入ったのが何日前なのかわからなくなった。

玄関の開閉の音で両親の外出と帰宅を知った。以前から両親とはあまり顔を合わせなかった。特別に不仲というわけでもなかったけれど、今も娘の突然の変化に動揺したり心配したり怒ったりしている様子はなない。ぼんやりと想像していた家族会議のようなものも開かれなかった。

毎日静かすぎる自室で過ごす、様々なものが頭を廻った。そのような浅い思考はどう頑張っても排除できないのだと気づいてからは、家に誰もいないことを確かめ、一階に下りて行ってテレビを点けるようになった。真剣に見ているわけではなかった。ただ自分と関係のない世界で関係のない誰かが、こちらの事情などお構いなしに喋り続けるのを視界の端に入れておくと、余計なものも割り込んでくることはなくなった。安心できた。気休めだったかもしれない。けれど、それでも私は逃げられるなら永遠に逃げたいと思った。自分の思考も肉体も鬱陶しくて、どこかへ行きたいのに選択肢の重みにいつも負け、テレビをつけたまま、窓の外、庭で光を浴びてかすかに揺れている雑草の、その根本の土の盛り上がったところをぼろと見ていた。

— その日、いつものように機械を通した人間の声を聞き流している

と、突然やわらかい言葉の連なりが耳に滑り込んできた。顔を上げると、テレビ画面の中央で大胆に髭を生やした男が女性タレントと喋っていた。四角い画面の隅には「LIVE」^①とだけ表示されていて、何日の何曜日なのかはつきりしなかった。

急に画面が切り替わる。私の目は反射的に次の映像を捉えた。カメラは何事か話し続ける髭の男と女性タレントを遠くに映しながら、額に入った絵を切り取っていた。

白と黒のコントラストが目を引き抽象画。一枚の葉か、人間の目玉、あるいは魚にも見える大きなモチーフが中心にゆらりと立ち上

がり、ペンで描かれた繊細な模様がヴェールのようにキャンバス全体を覆い尽くしている。誰かが、なにかが、叫んでいる。回らない頭に想像が広がる。諍い、傷、報われない努力、多くの人の嘆きと、苦痛と、ほんの少しの希望。

残酷だった。残酷なのに、なぜか少し胸が高鳴った。私はここに描かれているものの片鱗を知りつつあるのだという気がした。「正しい私」が私を責める言葉を見失っていることに気づいて、私はどきりとした。

— なんとなく！ 凄いですね。なんとなく、こんな絵は描けませんよう。どうやってアイデアを出すんですか？

— いやあ、俺にもわからないっす。

男の言葉は容易に私の耳を通過し、すんと心に落ちてきた。それが不思議で、私は画面を見つめ続けた。

— 勝手に出てくるとかですか？ すごい！ 降りてくる、ってよくアーティストの方々、言われますよねえ。

— いやーそんな大層なもんじゃないっすよ。降りてくるというより、もうずーっとわかんなくて、わかんないから、それをそのまま描いてるみたいなどこ、あるかも。

それを聞いた瞬間、何かとても多くのものが頭を駆け抜けた。一瞬、霧が晴れる。その光差す隙間を絶対に逃さないよう、私は目を凝らした。

ずっとわかんなくて。そのまま描いてるみたいな。言葉が脳内を反復し、少しずつ私の中にあつたものが結びついてゆく。なんとなく。わかんないから。描いている。大層なもんじゃ。しっくりくるっというか。

私はテレビをそのままに、自室へ走った。棚をひっくり返すようにしてクロッキー帳を取り出す。そのあいだも耳に張り付いた男の声が反響している。私は十数冊のクロッキー帳の中から一番古いものを選んでめくった。表紙の裏に、四つ折りにした白い紙が二枚挟み込んであった。解いていない数学のプリントの裏に書いていたのだということ、今になって知った。

見覚えのある穴。肯定だ、と穴に触れながら思う。混乱し、興奮しているのになく視界が澄み渡っている。なにかが見つかるといふ確信があった。今だったら、あの淀んだ渦を止められる。荒れ狂うあの黒い液体を、溢れ出す粘った血をちゃんと見つめて、指をいっばいに伸ばして手のひらを正面に突き出して、落ち着け私、と話しかけることができる。

指が触れている紙の感触を、敏感に感じ取る。そして慎重に、紙を開いてゆく。

「なんで？」と穴。そして乱暴に走った赤い線。

目の前に現れたそれらに、私は知っていたはずなのに強い戸惑いを覚える。私が私を見つけた。透き通ったなにかが全身を貫いてゆき、少し遅れて、死んでいたやわらかい部分が息を吹き返す。――わかんない。あ、涙、と思ったそのときには顔に持っていた手が広く湿るほどに泣いていた。泣いてる、といつもなら思うところだが、そんな暇も余裕もなく、私はただ泣いた。心も身体も、ちゃんと泣いていた。歪めた顔の筋肉が引き攣って、涙の膜に覆われた視界が波打つて、何も見えなくなった。あの日紙に押し付けたペンの軽さと身体の怠さを、混乱の中に思いついた。中学のスカートは長く重くて、腰回りがやたら締まるのが不快だったことも思い出した。私は次々にクロッキー帳のページを繰った。叫びたい気持ちだったのに、少しだけ漏れた声は尻すぼみに消えていった。息だけがひいひいと出たり入ったりした。いくつもの感情が紙の上に生きていた。叫んだり迷ったり苦しんだりしていた私が、どうしようもなくなくなつては生きようと藻掻いていた。私はいつとも泣いていた。泣いてばかりいた。何も知らなかった。

わかんない、と私は自分に言った。脳内に流れ続けた男の言葉と私の言葉とが重なり、何度も繰り返すうちに私の声で再生されるようになった。わかんない、わかんない、わかんない、わかんない。わかんない、そんな、訊かれても困るよう。そんなの、僕に訊かないでくださいよ。知らないわ。あなたが自分で考えること、それが大切なんですよ。そう言われたのだった。彼だけが「じゃあ俺も考えてみるよ」と言ってくれた。

クロッキー帳を抱えて床に寝転がる。ああそうか、と心からの納得が湧き上がる。顔の横から耳に向かって流れる涙が冷たかった。他人との距離がわからなくなつて、学校に行かなくなつて、生活さえままならなくなつて、私は私の弱さを知つたはずだった。でもそれは、違うかもしれない。

私は、ずっと渦の中にいた。荒れ狂う流れの中でひとりきりだった。それでも力強く、藻掻き続けてきたのだ。誰にもわからなくて、誰にもわからなかったのだ。私はずっと、私を頼って生きてきた。

*

わかんない。私はクロッキー帳の一ページ目にそう書いた。求め

ていた言葉はもつと別にあつたのかもしれないが、今の私にとって

「わかんない」はとても的確だった。それから、新しいクロッキー帳と一緒に買ってきた画用紙を机に広げて眺めた。その白さに目を細めてから、鉛筆、カッターナイフ、消しゴムも傍に置く。何か描こう、と思った。男がそう言ったからだ。私はまだ、何もわからない。ここから見つけていくだけだ、

と思いがけず前向きな言葉が生まれて胸が鳴った。ティッシュペーパーを箱から引き出して机の上に広げる。カッターナイフと鉛筆を手に取り、刃を鉛筆の先に添わせて動かしていく。木がめくられて、丸まって、広げたティッシュペーパーの上に落ちる。私を覆っていた古く汚れきった表層も、一緒になつてしよりしより言いながらめくられてゆく気がした。黒ずんでいない、真新しい木材が顔を出す。胸の真ん中に、透き通った空気が入ってくる。頭が冴え渡る。

「あつ」
切った。そう気づいた直後、赤い粒が人差し指の端に膨らんでいった。きらりと光るカッターナイフを机に置いて指を顔に近づける。痛みはない。おそろく傷は深くない。ただ、血だけがどどん溢れてくる。人差し指を支える親指の腹に脈動が感じられて戸惑う。画用紙を汚さないよう、私は身体を後ろに引いた。けれど指先は拭かない。膨らんでゆく艶やかな粒を目の前に掲げて、私はそれをじつと見守った。

私を攫った大きな流れが引いていくのを感じた。同時に気づいている。渦はまた現れ、また荒れる。私はまだ、何かを探さなければいけない。

画家である男はのちに言った。「少なくとも僕にとっては、わかんなーって思いながら見てるその視線みたいなものが、描く者としての自分の大事な部分かなって思いますね。わかんないけどぶつかってると、自分描いてる！って思うというか。：まあなんか、そういうことを上手く説明できないんで絵を描いてるんっすよね、たぶん」。彼は笑い、ほんとただの馬鹿なんで、見て、真似て、じつと考え込んで：：って、そればっかです、と付け加えた。はは、は、というぶ厚い笑い声が私の内側をやわらかく撫でて通り過ぎていった。

膨らみきった赤い粒はやがて形を崩した。人差し指の脇を伝って流れる血が、皮膚の皺を浮き上がらせ、爪の隙間まで赤く染めてゆく。途端に不気味さが増した自分の手に私は少し驚く。慌てて椅子から立ち上がってティッシュペーパーに手を伸ばし、そして太腿を強く机にぶつけた。

「いっ、たい」

掠れた声が出た。血を流し続ける指よりもずっと強い痛みがしばらくそこに残る。痛覚と視覚のずれが妙で、私は一瞬動きを止めた。その静寂のあと、少し遅れて「わかんない」が書かれたクロッキー帳が落下した。足元で平たい音が鳴って我に返る。ふうっと口から息が漏れた。安堵に似たやわらかい息だった。私はそのまま画家の男を真似て「はは」と呟いてみた。そうしたら本当に笑えてきて、ティッシュペーパーを人差し指に押し付けたまま、喉の奥から笑い直した。

鮮やかな赤がゆっくりと滲んでくる。押さえた指があたたかかった。